山 形 大 学 紀 要（教育科学）第18巻 第３号 令和 ６ 年２月
Bull. of Yamagata Univ., Educ. Sci., Vol. 18 No. 3, February 2024

上級学年留学生との話し合いにおける日本人学生のスピーチレベルシフト
―普通体使用に着目して―

仁科　浩美
山形大学工学部国際交流センター
（令和５年11月８日受理）

要　　旨

日本人学部生と院生留学生、計4名から構成される課題のある話し合いにおいて、スピーチレベルシフト、特に丁寧体から普通体いわゆる友達言葉へのダウンシフトが見られた日本人学部生について、発話の相手を分析し、その使用の要因を検討した。その結果、メンバー全員に向けての友達言葉の使用が最も多く見られた。これにより、スピーチレベルの選択において､院生留学生が上級学年であることへの認識の優先度は低いことが分かった。また、司会を担当した日本人学部生は話し合いの進行の場面においてのみ丁寧体を使用したが、話し合い自体は終始ほぼ友達言葉を基調としており、スピーチレベルを使い分けようとする意識が低かった。これらの要因としては、対人関係に配慮した言葉遣いに関する意識・関心が低い、日本人学生間の上下関係と留学生との関係は別物と捉えている、友達言葉である普通体を用いることで心的距離を縮めようとしたといったことが推察された。

１．はじめに

少子高齢化による労働人口の減少を背景に、外国人材の受け入れが増えており、非日本語母語話者と日本語を用い協働で働くということが珍しくない時代を迎えている。これに対応するには、大学時代から多文化共生を意識し外国人と接する経験を有することがその後の社会人生活にも大いに役に立つと思われる。グループワークを行う際には、提案、意思表明、合意といった自らの考えを非母語話者と意見交換していく、話し合う力が必要となる。どのように複数の参加者の考えをまとめ、合意を得ていくかという視点からの研究もある（仁科2022）が、本稿では対人関係に関与する文末の表現について取りあげる。日本語で発話を行う際、丁寧体（デス・マス体）で話すか、普通体（ダ体)、いわゆる友達言葉・タメ口で話すか、話者はそのスピーチスタイルを選択することになる。一人の話者の中でも場面･状況により丁寧体から普通体へ、あるいは、その逆といったように、スピーチレベルシフトが起こる。大浜他（1998）はスピーチレベルシフトを「敬語の使用・不使用、文末文体の丁寧体・普通体の使い分け、あるいは美化語の使用・不使用など、対話相手や場面、話題などによって表現スタイルを変えること」と定義している。

金（2022）は、一般に日本語母語話者にとって、タメ口は母語話者には敬語の対極にある待遇表現として認識されており、接触場面の初対面会話におけるスピーチレベル運用を

考察する上で母語話者の日本語観を映し出す重要な用語だと述べている。例えば、母語話者同士による初対面場面で、丁寧体から普通体に変わるダウンシフトは、相手との力関係が顕著に反映されるため、慎重に行われるという。しかし、日本語母語話者と非母語話者が日本語でコミュニケーションをする接触場面でのスピーチレベルの運用においては、母語話者同士のそれとは異なった様相をみせ、それが非母語話者には誤解を生ずる要因にもなっていることを指摘している。

筆者は、日本人学部生と上級学年の院生留学生から構成されるグループでの話し合いを観察した際、金（前掲）が述べるように、日本での慣習としては丁寧体が期待される場面で、課程および学年が下の日本人学部生が普通体で話す場面に遭遇した。本稿では、この現象に注目し、明らかに課程・学年の差がある場面で、日本人学部生が普通体を使用した実態を分析するとともに使用の要因について検討する。

２．先行研究

日本語母語話者同士の会話によるスピーチレベルシフトについてはこれまで多くの研究がなされてきたが、日本語母語話者と非母語話者とを対象にした研究はまだ十分とは言えない。佐藤・福島（1998）は対談集を活用し、スピーチレベの適切さについて日本語母語話者と日本語学習者を対象に意識調査を行った。その結果、終助詞「ね」「よ」がつくと、日本語学習者の判断が日本語母語話者と差が生ずる傾向があることを示した。金（前掲）は、日本語母語話者と韓国人日本語使用者にそれぞれの過去の体験に関して、初対面での会話開始時、会話の途中での本人および話し相手のスピーチレベル等について質問している。その結果、日本人母語話者がタメ口で話す理由（選択式）として、最も多かったのは「タメ口のほうがわかりやすいと思った」、次いで「相手と仲良くなるため」であった。しかし、受け手の韓国人にとっては外国人ということでタメ口を使われることに戸惑いや不快を感じることがあることを報告している。回想しての回答のため、事実関係が不明瞭な点があるが、初対面での普通体使用が思わぬ誤解を生む可能性があることを指摘している。

上記の研究は質問紙調査による研究であるが、スピーチレベルシフトについて実際の発話データをもとに分析する際、対象となる話者の条件をどのように設定するかが重要となる。その条件とは、話者の母語（日本語母語話者同士か、日本語母語話者と非母語話者か、非日本語母語話者同士か）、面識の有無・親疎関係、話者の人数（２者か３者以上か）、話者同士の関係（友人、知人、上司と部下、先輩と後輩、無関係）、話者の職業（学生、教師、会社員など）、話す目的（自由会話か決まった課題あり）といったものである。これらの組み合わせにより多様な状況が生まれるが、本研究では、初対面に近い状況での学年差のある日本語母語話者の学部生２名と非母語話者の院生留学生２名、計４名での話し合いを分析対象としている。このような設定での研究は管見の限り見当たらないが、これに近いものとしては、張（2023）が実際に職場で交わされた技能実習生８名と各現場の日本人同僚との発話データを分析したものがある。同研究では、丁寧体が基本となっている場面で日本人同僚に「強い口ぶりで、念を押すとき」「職業規則を明示するとき」に普通体が使用される、すなわちダウンシフトが起こったことを述べている。職業規則の明示については「ポケットに手を入れない」という発話例が示されており、相手への直接的な語りかけ

というよりは禁止･注意事項の提示と言えるかもしれない。また､人数の面では､劉（2013）が日本語母語話者同士ではあるが、学年差のある親しい友人、日本人大学院生３人の会話を分析している。親疎関係より上下関係の作用が優位に働くこと、ダウンシフトは、相手に向けての発話ではなく、自分の意見や心情を一方的に表出する場合に観察されたと報告している。

さらに、話す話題に関し、従来の研究では、日常的な自由会話を対象としたものが多いが、本稿では、課題に基づき４名の参加者で考えをまとめて結論を出す話し合いを対象にする。そして、日本人母語話者側からスピーチレベルシフトについて考察する。

３．話し合いの概要

⑴　参加学生

話し合いは、表１に示すとおり、日本人学部生（Ｊ）２名と院生留学生（Ｉ）２名から構成される二つのグループによって行われた。参加学生は全て工学系の男子学生である。グループＡの日本人学生は学部２年生、グループＢの日本人学生は学部３年生で、院生留学生とは学年において２ ～ ３年の差がある。院生留学生の日本語力は、日本語能力試験Ｎ１合格者が３名とＮ１合格相当が１名で一定の日本語力は有しており、全員研究室でのコミュニケーションは基本的に日本語で行っている。親疎の状況についてはグループＡのＪ１とＪ２はときどき話す関係であったが、他の参加者はそのグループのメンバーとは互いに初対面であった。

なお、協力依頼にあたっては、事前に協力内容を説明し、文書により同意を確認した。

表1　話し合いの構成メンバー

グループA	グループB
・Ｊ１　日本人学生　学部２年 ・Ｊ２　日本人学生　学部２年 ・Ｉ１　院生留学生 博士前期１年 　　中国・在学期間８か月 ・Ｉ２　院生留学生 博士前期１年 　　マレーシア・在学期間４年８か月	・Ｊ３　日本人学生　学部３年 ・Ｊ４　日本人学生　学部３年 ・Ｉ３　院生留学生 博士前期１年 　　中国・在学期間８か月 ・Ｉ４　院生留学生 博士前期２年 　　中国・在学期間１年２か月

⑵　手順と話し合いの課題

話し合いを始める前に、アイスブレイクの時間として、日本人学部生と院生留学生がペアになり互いに氏名、学年、学科/専攻、出身等を聞き合った。その後メンバー全体に向けて他己紹介を行った。続いて、筆者による課題説明と注意事項確認の後、４名での話し合いに移った。

図１　４名での話し合いの様子

話し合いの課題は、開発創造型[1)]のテーマ「キャンパスの中に市民も使える憩いの

場をつくる」とした。約１時間で案を絵に描くところまで行い、最終的に代表者が絵を示しながら報告するよう指示した。

また、話し合いを円滑に進めるため、司会と記録係を決めてから内容に入るように説明した。座席は図１のように日本人学生と留学生とがテーブルを囲み、隣り合い、かつ、向かい合うように配置した。話し合うテーブルのそばにはホワイドボードを置いた。筆者は同室の隅で参与観察を行った。話し合いの様子は、ICレコーダーおよびビデオカメラに録音･録画した。 発話は宇佐美（2019）「基本的な文字化の原則」を援用し、文字化した。分析に際しては、録音・録画資料と文字化資料をもとに行った。

４．結果と考察

⑴　スピーチレベルと普通体多用の実態

アイスブレイクとして行った他己紹介の時間では、「はい。え、Ｉ２さんについて紹介します。Ｉ２さんは（氏名）さんです。えっと修士１年で（研究テーマ）について研究しています。ええと、マレーシアから来て、来た方で、えっと、日本に来て６年目、で、えー、米沢には４年間住んでいます」（Ｊ２）といったように、全員が丁寧体を用いてペアだった相手を紹介した。また、院生留学生を紹介した日本人学部生はいずれも留学生が院生であることにも触れていた。本稿では、この他者紹介の後に行われた話し合いの時間を分析の対象とする。

スピーチレベルの分類については、三牧（2002）、鈴木他（2022）、張（2023）を参考に「丁寧体」「普通体」「その他」の３つに分類した（表２）。なお、応答に関する発話「はい」「ええ」「いいえ」等は丁寧体類として、「うん」「ううん」等は普通体類として扱った。「ええと」「あー」等のフィラーや笑い声については、「その他」に分類した。

表２　スピーチレベルの分類

丁寧体	普通体	その他
・敬語ありの丁寧体言い切り[2)] ・丁寧体言い切り ・丁寧体＋終助詞 ・丁寧体＋接続助詞 ・ス体[3)]	・普通体言い切り ・普通体＋終助詞 ・普通体＋接続助詞	・言いさし文[4)] ・句で終わっているもの ・一語で終わっているもの

表３及び表４に２グループ８名のスピーチレベル別の文数を示す。Ｊ１とＪ４の発話文数が他者より多くなっているのは、それぞれがそのグループで司会を担当したためである。Ｊ１もＪ４も司会者として進行にかかわる発言部分では「デス・マス体」での丁寧な話し方が用いられていた。発話例１に一例を示す。

《発話例１》

Ｊ１：「じゃあ、まず最初、５分ぐらい、じゃあ、時間取って、それぞれなんかアイデア考えてみましょうか」（Ｊ１、No.57)、「なんか足りないところとかあります？」（Ｊ１、No.591）

Ｊ４:「あ、じゃあ、なんか、一人ずつ、なんか、ここ、新しくできそうっていうの聞

く感じでもだいじょぶですか」（Ｊ２、No.44）、「じゃあ、なんか、Ｊ３さんありますか」（Ｊ２、No.71）

表３　Aグループメンバーのスピーチレベル別 文数

	丁寧体	普通体	その他	
J 1	60	105	81	246
%	24.4	42.7	32.9	100.0
J 2	**1**	**90**	**25**	**116**
%	**0.9**	**77.6**	**21.6**	**100.0**
I 1	19	43	49	111
%	17.1	38.7	44.1	100.0
I 2	31	33	54	118
%	26.3	28.0	45.8	100.0

表４　Bグループメンバーのスピーチレベル別 文数

	丁寧体	普通体	その他	
J 3	36	25	17	78
%	46.2	32.1	21.8	100.0
J 4	**50**	**400**	**81**	**531**
%	**9.4**	**75.3**	**15.3**	**100.0**
I 3	15	8	17	40
%	37.5	20.0	42.5	100.0
I 4	141	10	62	213
%	66.2	4.7	29.1	100.0

しかしながら、Ｊ４の場合は、話し合い開始から13分を過ぎたころから丁寧体の使用は少なくなり、「じゃあ、一回じゃあ、どうする、③からしゃべる？、近いから」（Ｊ４、No.236）というように丁寧体から普通体にダウンシフトした。

日本人学部生４名の丁寧体使用と普通体使用の割合を見ると、Ｊ１、Ｊ３には50％を超えるスピーチレベルはなく基本的なスピーチレベルというものが明確でないが、Ｊ２とＪ４においてはどちらも普通体使用が75％を超えていることに注目したい。Ｊ４については、前述したように、進行にかかわる司会としての発言の際には、丁寧体に切り換えているので、その際には普通体から丁寧体へのアップシフトが見られる。具体例を発話例２に示す。記号の説明については注５）を参照されたい。No.220からNo.225までは友達言葉の普通体が続いているが、参加メンバーへ意見を募る司会としての意識が働く場面では、「～あります？」（No.226下線部分）と丁寧体を用いている。

《発話例２》

220	J 4	体育館と食堂の間、あそこー、なんか使えるといいね。
221	I 3	うん、うんうんうん。
222	J 4	あそこはなんか、結構スペースあるからどういうふうにするかね。
223	J 4	そう、木があるからさ、あれをサッカーやったとき、ゴール代わりにしてたんだけど、木と木の間。
224	J 4	あそこ、転ぶと危ない、から、なんか、しっかり整備するとか。
225	J 4	≪沈黙　３秒≫オッケオッケ。
226	J 4	あのスペース、何に利用したい≪沈黙　１秒≫とかあります？。
227	I 4	≪沈黙　１秒≫あ、屋根付きの建物などの食事ができるようにという感じでだいじょぶですか。[ボード書き、確認求める]

しかし、Ｊ２については、発話例３に示すように、Ｊ２の初回の「ですね」（No.8）は丁寧体で始まったものの、話し合い１分ほどの２回目のＪ２の発話（No.12）からは普通体に切り替わり、それ以降は最後まで丁寧体が用いられることはなかった。

《発話例３》

7	Ｊ1	じゃ、記録は日本人のほうがいいですか。
8	Ｊ2	ですね。
9	Ｉ1	はい、ふふふっ。
10	Ｊ1	分かりました。
11	Ｉ1	お願いしまーす。
12	Ｊ2	まあ、だよね。
13	Ｉ1	はい。
14	Ｊ2	うん。

⑵　発話が向けられる相手

メンバー構成を考えると、４名からなるメンバーのうち、Ｊ２またはＪ４以外に同学年の学生は１名で、他の２名は上級生という状況であるとき、Ｊ２およびＪ４の丁寧体使用率が10％に満たず、このような結果となるのはなぜか。この問題を考える際、２者による会話と大きく異なる一つの特徴は、４者の場合、誰に向けての発話かが不明瞭な場合があることである。

そこで、このＪ２及びＪ４の普通体の使用箇所について、その発話相手を明確にすることで普通体が頻出する要因を検討することにした。分析にあたっては、筆者の他に学生が属する工学部の日本人教員にも協力を求め、録画ビデオを基に発話が誰に向けてのものか､｢全員｣｢３者のうちの特定の相手名｣｢独り言｣のいずれかで２名それぞれが分類した。判定の一致率は、Ｊ２の普通体発話が75.6％（68箇所）、Ｊ４の普通体発話が78.3％（313箇所）であった[6)]。この一致した箇所について発話の相手を示したのが図２､図３である。Ｊ２、Ｊ４の発話数はかなり異なるものの、普通体の発話が最も多く向けられたのは、メンバー全員に対するものであり、その割合はどちらも65％前後を占めた。これは、全体へ向けての発言の場合、自分以外のグループ構成者は、同学年１名、上級学年２名と上級学年が人数において優勢であっても特に丁寧体を選択することなく、普通体を選択したということである。場の盛り上がりや馴染んできた空気を重視してのこととも考えられるが、上級学年が日本人学生であった場合にも同様の結果になるのかどうかは疑問である。

さらに、Ｊ２はＩ２に、Ｊ４はＩ４の上級学年のメンバーに向かって、普通体で話して

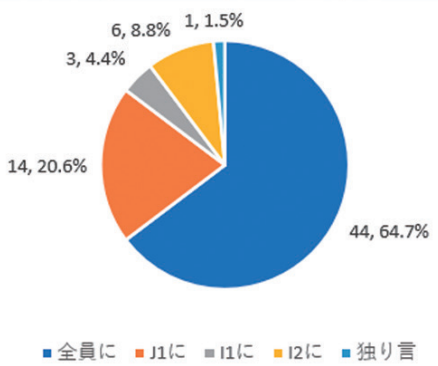

図２　Ｊ２ の普通体の発話相手

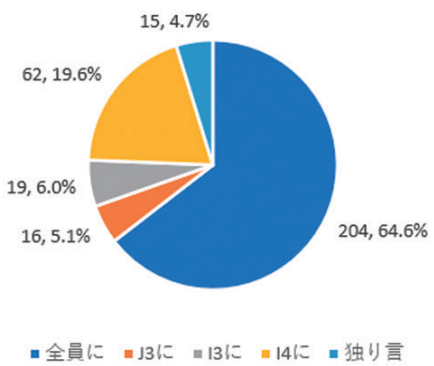

図３　Ｊ４ の普通体の発話相手

いる割合は全体の１ ～ ２割を占めており、直接話す場合にも普通体を丁寧体に切り換えて話すというレベルシフトは行っていないことがわかる。留学生は日本語の学習において、自然習得の場合でないかぎり、丁寧体で学習を開始するのが一般的である。そのためどうしても丁寧体のほうが言いやすく、また丁寧体と普通体の切り替えを人間関係や場面から切り替えるのを苦手とする傾向がある。それは、表３および表４において、Ｉ２とＩ４の丁寧体の使用率が各グループの中で最も多いことからも見て取れる。この日本人学部生と院生留学生の状況を踏まえると、発話例４・５のようないわゆる先輩・後輩が逆転した文末の現象が現れるのも一つのありえる形である。発話例４では、Ｊ２が話の展開を変えようとしたところから始まる。全員に対し、休憩する場所を利用する人別にするべきだとし、学生にはどんな場がふさわしいかをNo.93で尋ねているが、学生生活が一番長いＩ２はキャンパスには研究室しかないとNo.95、97で訴える。Ｉ２の発話は２回とも丁寧体を用いていることで、必ずしもＪ２の考え方に賛同していないことを控えめに主張しているように見える。Ｊ２のNo.96の発言はＩ２の丁寧体に挟まれたため、学年差を知る第三者の聞き手によっては横柄に聞こえるかもしれない。一方の発話例５においては、中国の大学を参考にして考えようとするＪ４と情報を提供するＩ４のやりとりである。Ｉ４の

《発話例４》

92	J2	やっぱりあれだよね、相手、対象が誰、誰向けのものかっていうので結構だいぶ変わるよね。	全員
93	J2	市民向けだったら、なんか、何だろう、例えば休憩する場所だったり公園とかがいいだろうし、学生だ、学生、何だろうな、学生も同じかな。	全員
94	J1	同じだな。	
95	I2	でも、工学部、たぶん、もう、ここら辺全部研究室ですから。	
96	J2	そう、研究室だからね。	I2
97	I2	全部研究室ですから。	

《発話例５》

251	I4	サッカーとかバスケットも、その、≪沈黙　1秒≫えーと、専用な、その、地面というか、が必要、出し入れと、の、を、体育館の、う、えっと、中は、まあま、一応その、と、す、えー、バスケとかできるなんですけど、もう外でもバスケができる、こう、簡単な。	
252	J4	あー、いいじゃん、いいじゃん、確かに確かに。	F6
253	I4	と、中国の大学の中にはそういう、そ、外でバスケができる空間がたくさんつ、作られて、そのー、例えば休日のときで、と、外の人も、もうそこはくかんを、空間を活用していく感じで。	
254	J4	そっか、中国の大学の良さを取り入れるのも素敵だね。	F6
255	I4	はい、っふ。	
256	J4	うーん、いいじゃんいいじゃん。	F6
257	J4	確かに、なんかそう、台とかある感じね、バスケットゴール入れて。	F6
258	I4	はい。	
259	J4	いいね、じゃ、あそこを、そのなんか、アスファルトっぽくする感じなんだ。	F6
260	I4	はい、アスファルトっぽく感じで、まあ、と、ま、私が考えられるのは。	
261	J4	うんうんうん。	F6

説明に対し、No.252、256「いいじゃんいいじゃん」、No.254「素敵だね」と普通体で評価する姿はいわゆる「上から目線」ととられる可能性もある。このスクリプトの文字情報だけから二人の関係を想像すれば、おそらく日本語母語話者の多くはＪ２、Ｊ４が上の立場の人間と想像するだろう。

⑶　普通体が多用された要因

アイスブレイク時には、全員が丁寧体の「デス・マス体」で話していたが、話し合いでは日本人学部生のＪ２とＪ４は普通体がその個人の発話数の３/４を占めるほど多用していた。スピーチレベルシフトが適切に運用されていないとも言えるが、このような現象が生じた要因としては３つ考えられる。

一つ目は、対人関係に配慮した言葉遣いに関する意識・関心が低いことである。筆者が終了時に本人らにそれとなく「普段も学年が上の人にもタメ口で話します？」と尋ねてみたところ、「え、全然気づいてませんでした」と回答し、その使用に全く意識が及んでいなかった。４名という構成メンバーの影響で、院生留学生だけでなく同じ日本人学部生もいることから、その学生に話しかけるのと同じ気持ちで普通体を使っていたのかもしれない。しかし、文化によっては日本語以上に上下関係に厳しい言語文化を持つ所もあり、今回のようなダウンシフトしたままの意見交換の発言はあまり良い印象を持たない聞き手もいることが推測される。学部２年、３年ということで、社会での公な場面でコミュニケーションを図る経験がまだ少ないことも考えられ、場や相手を意識したコミュニケーションのあり方を学ぶことが肝心である。

二つ目は、日本人学生間の上下関係と留学生との関係は別物と捉えていることが推察される。これは前述の金（前掲）も指摘しているが、日本人同士の場合に使用される規範を留学生にあてはめていない可能性がある。アイスブレイク時に学年の差は認識していたと思われるが、それが待遇表現に反映されることはほとんどなかった。一つの事例として、院生留学生が聞きなれない日本語、例えば、「ブランコ」「イルミネーション」などの単語が話されたとき、その意味を日本人学部生が説明する場面が何回かあった。院生留学生はもちろん意味は知っており、音からその語をイメージできなかっただけなのだが、日本人学生であれば、このレベルのことを上級学年が質問するはずがなく、学部生が教えて院生が教えられるという通常とは反対の図式になった。研究室のような組織だった場での長期的な関係であれば先輩という意識も働くのであろうが、このような留学生からの質問場面も影響し、日本というこの場合のホスト国にいる学部生には今回の院生留学生との間に日本式の上下関係は作用しなかったのではないか。多文化共生が進めば、外国人との協働での活動も体験するだろうが、外国人だから上下関係を意識した話し方は不要とはならないだろう。これについても学生のうちから日本語母語話者ではない留学生との交流を通し、外国語を扱うことの大変さを理解できる経験が求められる。

三つ目は、友達言葉を用いることで心的距離を縮めようとしたことが考えられる。今回、日本人学部生は院生留学生と初対面であったため、友好的な空気のほうが互いに居心地がよいと考え、くだけた普通体を無意識に選択した可能性がある。実際に時間が経つにつれ、互いの様子がわかってくると、普通体にシフトする傾向が見られた。しかし、一つ目の要因と同じように、もし、院生留学生が日本社会での言語規範について「友達言葉は目上の

人に使ってはいけない」と学習していた場合、なぜ上級学年の自分に学部生が友達言葉で話してくるのか疑問に思うだろう。また、簡単な日本語で話そうとして、普通体を選んだのであれば、それも一概に良い案とは言い難い。

スピーチレベルシフトは、相手との関係性や場面に応じて適切なレベルを選択し、調整しながら行うものである。今回は同学年２名と上級学年２名からなる構成であったので、スピーチレベルシフトがある程度起こることを期待していたが、日本人学部生２名についてはダウンシフトが優勢なまま話し合いを終えた。

５．まとめ

日本人学部生と院生留学生、計４名から構成される日本語による話し合いで、普通体が基調となっていた日本人学部生２名について、普通体での発話が向かう対象とその使用実態を明らかにするとともに、その要因を検討した。その結果、普通体使用はメンバー全員に向けて話されているケースが最も多かった。これは、今回の院生留学生が上級学年であることはスピーチレベルを上げる選択をするだけの条件にはなっていないことを示している。１名は、話し合い冒頭で丁寧体を一度使用した後は、普通体一辺倒となり、相手によってスピーチレベルを使い分ける意識が欠如しているように思われた。また、別の１名は、司会を担当した進行の場面においてのみ丁寧体を使用したものの、司会者と個人としての発言とが混在し、院生留学生との立場が逆転しているような印象を受ける場面が見られた。そして、相手や場面に応じたスピーチレベルシフトが現れなかった要因としては、対人関係に配慮した言葉遣いに関する意識・関心が低い、日本人学生間の上下関係と留学生との関係は別物と捉えている、友達言葉を用いることで心的距離を縮めようとしたといったことが推察された。

今回の事例は数が少ないため、よりサンプル数を増やし分析を行う必要がある。また、上級学年の日本人学生との対比や、フォローアップインタビューなどを組み合わせ、多面的に分析を行うことを今後の課題としたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 19K03162 の助成を受けたものです。ここに感謝の意を表します。

山形大学学術研究院 理工学研究科主担当 安原薫先生には分析を行うにあたってご協力いただくとともに、貴重なご意見を賜りました。深く感謝申し上げます。

注

１）テーマに基づきゼロからモノを創造するタイプの話し合いを指す。

２）「司会やりたい方とかいらっしゃいますか」といった敬語を使用した文。

３）今回の話し合いでは、日本人学部生、院生留学生を問わず５名から各１回ずつ「っす」「っすね」「っすよ」「っすか」「っすよね」の使用が見られた。中村（2020）は、これを「ス体」と呼んでいる。本稿ではこれを親しい丁寧さを表す表現として丁寧体の枠に分

類した。

4）「それで人が入りやすく。」「確かにイルミネーション、この木とかに。」のような途中で終了する、接続助詞以外で終了する発話文

5）表の項目は左の列から、発話番号・発話者・発話内容の順に並んでいる。

会話データ記号：

下線部分：注目部分　　［ ］：発話時の特徴的な行動や補足説明

≪≫：１秒以上の沈黙　　？。：質問文の終了

6）判定が一致しなかったものとしては、その発話を前言の発話者への返答とみるか全体への発話とみるか、独り言とみるか全体への発話とみるかといったケースが多かった。

参考文献

1．宇佐美まゆみ（2019）「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese：BTSJ）2019年改訂版」https://isplad.jp/wordpress/wp-conteut/uploads/2020/01/BTSJ2019.pdf （2022年８月20日閲覧）

2．大浜るい子・鈴木雅恵・多田美有紀（1998）「自由談話に見られるスピーチレベルシフト現象」『中国四国教育学会　教育学部研究紀要』44（２）：389-397.

3．金孝珍（2022）「接触場面の初対面会話におけるスピーチレベル運用の傾向―タメ口使用とそのメタメッセージに着目して―」『社会言語科学』25（１）：198-213.

4．佐藤勢紀子・福島悦子（1998）「日本語学習者と母語話者における発話末表現の待遇レベル認識の違い」『東北大学留学生センター紀要』４：31-40.

5．鈴木奈央・徳永弘子・山田晴奈・楊井一彦・高柳直人・平石牧子・武川直樹（2022）「初対面の高齢女性二者会話における親疎関係の調整プロセス―話し手と聞き手におけるスピーチレベルの観点から―」『人工知能学会研究会資料』94（０）：52-57.

6．張学盼（2023）「日本語のスピーチレベルシフトの生起条件と機能：鉄骨工場で働く技能実習生に向けられた日本人同僚の発話の分析から」『東アジア研究』21：51-73.

7．中村桃子（2020）『新敬語「マジヤバイっす」―社会言語学の視点から』白澤社

8．仁科浩美（2022）「工学部に属する日本人学生同士及び留学生との話し合いにおける合意形成」『工学教育』70（4）：56-63.

9．三牧陽子（2002）「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示―初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に―」『社会言語科学』５（１）：56-74.

10．劉雅静（2013）「友人同士3者間会話におけるスピーチレベルシフトについて―上下関係のある親しい友人同士の会話データをもとに」『言語学論叢』オンライン版６：34-48.

Summary

Speech-level Shifts of Japanese Students during Four-way Discussions with Senior International Students: Focusing on the Use of Plain Style Japanese

NISHINA　Hiromi

This study examined the target persons and factors influencing the downshift use of speech-level shifts during discussions that involved Japanese undergraduate students and international graduate students. The primary focus was on the Japanese undergraduate students who transitioned from the polite style to the more casual, plain style or the so-called "friendly" language form. As a result, the most prevalent use of the "friendly" language was directed toward all members of the group. This indicates that the grade differences was not reflected in their speech-level choices. The Japanese undergraduate student who acted as the moderator utilized the polite style only while facilitating the discussion. However, the discussion predominantly comprised the "friendly" register, revealing a limited recognition of the need for speech registers. Factors inferred to have contributed to these outcomes include a lack of awareness and interest in interpersonal language nuances, a perception that hierarchical relationships among Japanese students differ from those with international students, and an effort to reduce emotional distance by employing the more casual "friendly" speech.

Faculty of Engineering, International Exchange Center, Yamagata University